

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

山峡独特の風味を持つお茶と集落全体で育む「あじさい」でお接待するむらづくり

受賞者 <sup>しんぐう</sup>新宮あじさいグループ  
(<sup>えひめけんしこくちゆうおうし</sup>愛媛県四国中央市)

## ■ 地域の沿革と概要

平成16年4月1日に、<sup>かわのえし</sup>川之江市、<sup>いよみしまし</sup>伊予三島市、<sup>どいちよう</sup>土居町、<sup>しんぐうむら</sup>新宮村の合併により誕生した四国中央市は、愛媛県の東端部、四国のほぼ中央に位置している。人口約92,000人、総面積420km<sup>2</sup>で、林野が77.7%を占め、田畑は2.6%となっている。市の北部は、東西約25kmにわたる海岸線沿いに平野が広がり、その東部には「製紙・紙加工業」の企業群が集積する都市的地域である。一方、干拓地や基盤整備水田が展開する西部や、市内の水源地域である富郷地域を有する南部では、農業生産が盛んである。

農業生産では、市内中央部を東西に連なる<sup>ほうおう</sup>法皇山脈を境に、北部の「嶺北」と南部の「嶺南」の二地域で異なる特色を有している。比較的平坦な嶺北地域では、水田を中心に県内で生産量一位を誇る里芋栽培、稲作、採卵鶏・養豚の飼育が盛んであり、旧新宮村が位置する「嶺南」地域では、山間部の立地、気象を生かした茶、クリ、シイタケなどの生産が盛んである。

気候は、平均気温16.0℃、年間降水量約1,261mmの温暖少雨な瀬戸内気候であるが、日本三大局地風といわれる「やまじ風」により、農作物等に被害を及ぼすことも少なくない。

## 第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

## 第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落(11集落)
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	65.1% 総世帯数 238戸 総農家数 155戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 11戸 1種兼業農家 5戸 2種兼業農家 7戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,110ha 耕地面積 12ha 田 1ha 畑 6ha 耕地率 0.6% 農家一戸当たり耕地面積 0.1ha

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

新宮あじさいグループがある四国中央市新宮町上山地区は、「嶺南」地域

に位置し、背後に四国山脈が控える急峻な地形で、平坦地は市の総面積21.1 km<sup>2</sup>の0.66%に過ぎない。

また、農家1戸当たりの経営耕地面積も約8aと零細で、農業経営基盤が脆弱である。昭和55年の堀切トンネル開通と、平成4年の四国横断自動車道の一部完成により、旧川之江市や旧伊予三島市への通勤が可能となったことから、若年層を中心とした人口流出や兼業化の進行が著しく、地区の人口は509人で、ピーク時（1925年2,731人）の18.6%にまで減少している。

当地区は、昭和29年に導入された茶（「やぶきた種」）の産地として有名であり、冷涼な山間傾斜地で山峡独特の深い味わいと高い香りを持つ無農薬の「新宮茶」を生産している。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 「香り日本一」の評価を受ける新宮茶

旧新宮村は、山間部に位置し産業基盤が弱く、戦前・戦後は、葉たばこや養蚕、<sup>こうぞ</sup>楮、<sup>みつまた</sup>三桮などの産出が地域の基幹産業となっていたが、これらの需要減退により、地域の活力は徐々に低下していった。

こうした中、昔から「やま茶」が自生し、手もみ、日乾番茶などの製茶が行われていた点に着目し、昭和29年、村の基幹作物として静岡県から「やぶきた種」を導入し、茶栽培が本格化した。

茶栽培は、村内でも特に冷涼な山間・急傾斜地に導入され、小規模で手間がかかり、コスト高を余儀なくされるものの、山峡独特の深い味わいと高い香りを持つ逸品として、昭和45年には静岡県の茶業試験場から高評価を受けるまでになった。

#### イ 「お茶のみグループ」結成

昭和48年4月、上山地区の女性17人が生活改善グループ「お茶のみグループ」を結成し、山間部での不便な生活に利便性を求め、共同購入や山菜加工、そば打ち、コンニャク作りなど農産加工を中心とした活動を開始した。



写真1 お茶のみグループ

昭和50年、車が通行できなかった狭道が拡幅されたことを契機に、いつまでも道路を大切にしたいという気持ちを込めて「何か事起こしをしよう」と話し合いを重ね、道路脇へのあじさいの植栽や下草刈りなどの世話を始めた。

#### ウ 「中野あじさいグループ」誕生

平成元年、「お茶のみグループ」は、グループ員の高齢化によりあじさいの管理ができなくなり、役場、農協等関係機関に解散の意向を伝

え、16年間の活動に終止符を打った。

しかし、同年6月、あじさいを見に来た観光客にお茶と手作りの団子のサービスを行ったところ、「祭りをしてはどうですか」と勧められたことをきっかけに、祭りの開催に向けて集落で相談を重ねた。

同年9月、集落の総会において、「あじさいは集落の財産」という住民の思いが一つにまとまり、上山地区の中野など3集落18戸全世帯参加による「中野あじさいグループ」が、10月30日に誕生した。

#### エ 「第1回あじさいまつり」開催

中野あじさいグループでは、第1回あじさい祭の開催に向けた受入環境整備のため、集落の点検地図を作成し、ベンチや水飲み場を手作りするなど、あじさいロードの整備を開始した。

また、「名所には名物あり」との思いから、地区で受け継がれた団子に着目し、名物「あじさい見<sup>み</sup>団子<sup>だんご</sup>」を誕生させた。

こうして、平成2年6月に第1回あじさいまつりが開催された。平成6年からは、あじさいまつりの前後にもお接待を開始した。

#### オ 「新宮あじさいグループ」へ組織拡大

平成8年、中野集落だけでは活動が難しくなってきたため、近隣の8集落に呼びかけて会員を募り、組織拡大に努めた。

そして、同年4月に名称を「新宮あじさいグループ」に改め、その後に参加集落の範囲を上山地区東部全域まで広げており、現在では11集落で構成する組織となっている。

#### カ 「あじさいの里」と「あじさい茶屋」の整備

平成9年、道路脇以外にあじさいを鑑賞できる場所を作ろうと、地主から無償で耕作放棄地の棚田を借り受け、多数の方から寄付や作業支援を受けてあじさい園の整備を始めた。

雑木の伐採や小型の重機による整地を行った上で、遊歩道の設置、あじさいの苗木の植栽、草刈り作業を行い、3haの棚田に

1万株のあじさいを植栽した「あじさいの里」が完成した。

平成10年には、グループ員の手作りであじさい茶屋<sup>かや</sup>を建設した。建設に当たって、材木は山から切り出し、茅などは無償で譲り受け、土地は無償で借り受けるなど、会員の自助努力・相互協力で整備が進められた。

「あじさい茶屋」は、グループのアンテナショップとして位置付けられており、情報発信や交流の場所のほか、来訪者の食事や休憩場として利用されている。



写真2 開花を迎えた「あじさい園」

## (2) むらづくりの推進体制

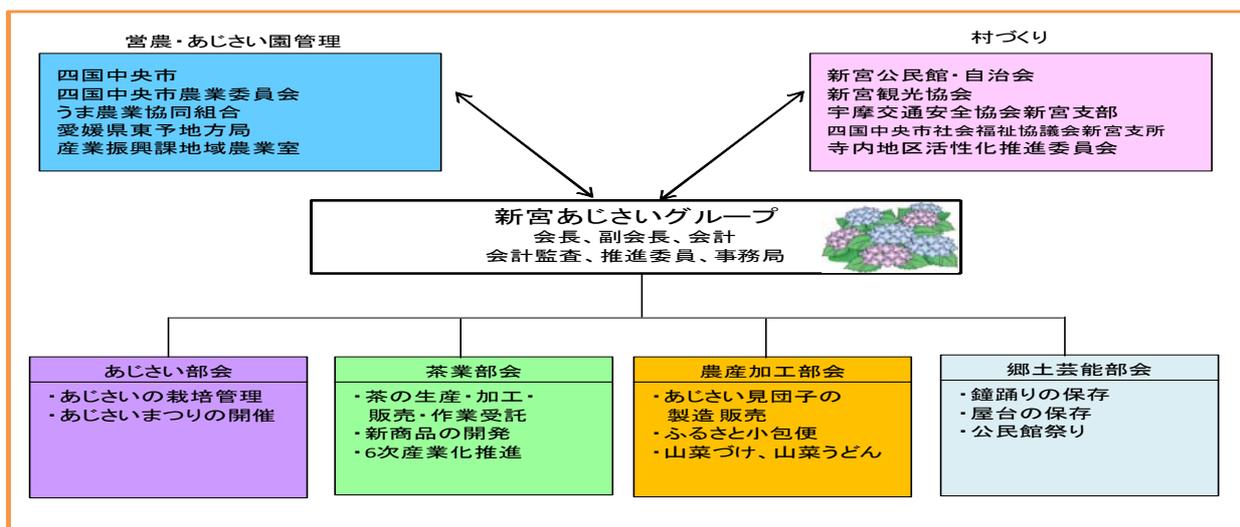
新宮あじさいグループは、総会においてグループ員が自由に意見を交換しており、地区住民が一体となって活動できる体制を整備している。地区内11の小集落ごとに設置した推進委員を中心に、連絡網の整備・情報発信を行っており、公民館や小・中学校と連携して子供たちやPTA、愛護班、地区住民が一つになったむらづくりを行っている。

また、四国中央市は、グループが行う「新宮あじさいまつり」や、あじさい園の維持管理が円滑に進められるように財政支援を行っている。

そのほか、県、市、農業委員会、JAうま等の農業関係機関・団体が連携し、上山地区に適合する茶の栽培技術の実証・普及、儲かる農業の実現に向けた新商品開発や販路開拓、各種補助事業を活用した生産・加工施設整備など、むらづくりと特産茶の産地づくりを積極的に支援している。

さらに、グループ内に次の4部会を設置している。

第2図 むらづくり推進体制図



### ア あじさい部会

植栽や草刈りなどのあじさい栽培管理や、あじさい園に設置した遊歩道の点検や補修を実施するとともに、あじさいまつりを主催し、看板やのぼり設置などの準備を行っている。

### イ 茶業部会

茶園管理、収穫、茶工場での加工の作業受託、新商品開発などを行っている。

### ウ 農産加工部会

女性が中心の部会であり、「あじさい見団子」やあじさいまつりで販売される山菜うどんの加工販売、「ふるさと小包便」の発送等を行っている。

## エ 郷土芸能部会

昭和43年に県の無形民俗文化財に指定された「鐘踊り」は、県下の代表的な念仏踊りであり、上山地区の大西神社において、毎年8月1日(旧暦)に奉納されている。また、素鷲(そが)神社で行われる「屋台」は、京都の祇園神社をしのいで創始されたと伝えられており、太鼓と鉦で神楽を奏で奉納されるものである。

「郷土芸能部会」では、地域に伝わるこれらの郷土芸能を次世代に継承するための活動を行っている。

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

上山地区は、過疎化が進む条件不利の山間地域にあり、担い手の減少と高齢化の進行により、基幹産業である農業や生活の維持が困難な限界集落でもある。

そうした集落で、農道開通を契機に始めたあじさいの植栽活動が、住民の「田舎ならではの良さを生かし、田舎をもっと元気にしたい」との思いにつながり、「新宮茶」の生産とあじさいによるむらづくりが、40年以上継続されている。

女性17人で始めた活動は、中野集落全体、上山地区東部全域へと、徐々に支援の輪を広げ、11集落にわたる「新宮あじさいグループ」へと拡大した。「あじさい園」の整備や「あじさい祭り」の開催、無農薬茶の生産等に加えて、6次産業化等にも積極的に取り組むなど、活動の幅も徐々に広がっており、あじさいが取り持つ人と人との絆が農業生産や村の生活にも活力を与えている。

住民たちの自主的な発案により続けてきた取組は、子供たちにも「お接待」の心を育てている。あじさいの咲く頃には、地区外で生活する子や孫がふるさとの風景とおもてなしを求めて帰郷するなど、住民の連帯意識の高揚につながっており、高齢化や過疎化といった同じ悩みを抱える地域に対してむらづくりの一つの方向性を示している。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 環境に優しい農業の推進

地区では、昭和57年頃から、消費者の食への安全指向に対応するため、中核的な農家を中心に茶の無農薬・無化学肥料栽培に努めるとともに、除草剤を使わない動力草刈機による雑草の刈り取り、「茅」を畝間に被覆するなど有機主体の土づくりを励行している。

また、中山間地域等直接支払制度を活用し、環境に優しい農業や農村の環境保全活動を集落ぐるみで実践している。

#### (2) 分業化・作業受委託の推進

農業労働力の高齢化等が進む中、地域を挙げて茶畑を守り育てていくため、平成2年頃から分業化を進めており、重労働である摘採や整枝などの管理作業を認定農業者が担い、軽作業を高齢農業者と女性農業者が分担している。また、収穫・加工の作業受委託を推進するなど、茶の生産から加工に至るまで、合理的な集落営農システムを確立している。

### (3) お茶の消費拡大・高付加価値化を目指した新商品開発

グループの茶業部会は、無農薬・無化学肥料で栽培した茶の販路を開拓し、JA産直市や朝市、直販などによって販売している。

また、若年層を中心にお茶離れが進む中、消費拡大のために近隣の菓子製造業者と提携し、「緑茶あめ・ほうじ茶あめ」、「抹茶を使用した贅沢クッキー」などの新商品を次々と開発しており、現在も新たな加工品開発等の6次産業化に向けたチャレンジを続けている。



写真3 茶の加工品

### (4) 担い手の育成

上山地区の認定農業者は4戸（養豚法人2戸、茶2戸）で、うち2戸（養豚1戸、茶1戸）は、後継者を確保し地区農業の担い手となっている。

近年、新規学卒者はみられていないものの、Uターンで若い世代が戻り兼業の傍ら農業を手伝うほか、定年後に農業に携わる者も少なくない。

### (5) 農業生産面への寄与

本地区では、完全無農薬で「新宮茶」の栽培を行っており、一番茶・二番茶のみの収穫で収量は少ないものの、「茶業部会」を中心に地域の協力体制を構築し、高品質な茶の生産を維持している。

あじさいまつりや6次産業化の取組により、「新宮」の知名度が向上するとともに、販路が拡大している。



写真4 後継者による茶摘採

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) あじさいの花が運んできた地区の生活・環境改善道路の整備

平成2年から開催されている「あじさいまつり」は、平成25年には第24

回目を迎え、来場者は第1回の2千人から約1万人まで増加している。

あじさいの花が咲き誇る期間中、あじさい園までつながる国道は山間の至る所で路幅が狭く渋滞が発生していたが、このことを契機に国道の拡幅工事が進み、地区住民の利便性向上に大きく寄与している。

## (2) あじさいの花と団子による「お接待」

第1回のあじさいまつりから、地区住民は、訪れた観光客などに各家庭で昔から作っていた団子を振る舞う「お接待」を始めた。

その後、各家庭で作っていた団子とレシピを持ち寄り、試行錯誤を重ね団子の味を統一した。この団子は、集落の子供が『あじさい見団子』と名付け、あじさい祭りに欠かせない名物として定着している。



写真5 あじさい見団子

## (3) ふるさと小包便

平成2年度から、村内における任意グループや、生活改善グループ、農協など8団体が主体となり「新宮ふるさと友の会」を結成し、毎年7月と12月の年2回、特産物のお茶や野菜加工品を詰め合わせた「新宮ふるさと小包夏・冬便」を発送している。

詰め合わせには、新宮あじさいグループが担当する茶を使った菓子や餅のほか、茶、茶そば、干しシイタケ、梅干し、みかんジュースなどが入れられ、村外の消費者に届けている。

## (4) 子供たちを「あじさい」とともに大切に育てた地区住民

地区では、昭和55年以降、地域の愛護班活動も兼ねて子供たちに道路沿いの植栽や肥料やり、花摘みを体験させてきた。

また、「あじさい部会」を中心とする地区住民は、「次代に繋げるあじさいづくり」をモットーに、地区外に住む孫たちが訪れる際に栽培管理できるようにするため、道しるべとなるのぼりや画用紙を使った手書きのポスターなどを作成している。

地元の小中学校生も、あじさいロードに設置されている「ガードレールみがき」に汗を流すなど、訪れる人を持ってなす「お接待」の心を育んでいる。



写真6 ガードレールみがき